恋愛季節

城宝　凛華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋愛季節

【Ｎコード】
Ｎ５４９９Ｊ

【作者名】
城宝　凛華

【あらすじ】
三角関係が重なる、高校ラブストーリー。
いろいろな主人公の辛い恋が、表れている。
私の好きな人は…誰？
答えが見つからず、答えを探すため、普通の女子高生”雪菜”の取り合いが始まる。

1話

「ふぁぁぁ…」
日差しが、さし始めた朝。私は、窓を開けて、新しい空気を吸う。
今日は、待ちに待った高校入学式。
憧れの先輩が、いる高校。
レベルの高いと有名なこの学校に入るのには、ものすごい苦労だった。
中学三年の時の思い出は、
「勉強とか…勉強とか…。」
勉強しかない！
朝は、目覚めバッチリ。今日は、良い日になりそうだと生き込んでいたところ、ドアをノックする音が聞こえた。
「雪ちゃーん。昴君が、もう来てるわよー」
すばる！？その名を聞き、私は、一瞬で、布団の中に隠れた。
「雪ちゃん？寝てるのー？入るわよ」
ドアを開ける音が鳴り、足音が、私のところへ近づいてくる。
私は、布団の中で寝たフリをした。

ん…？あれ？
お母さんの声が、しない。

私は、お母さんは、もう部屋を出たのかもしれないと思い、そっと布団から顔覗かせると、
そこには、大きな人影があった。
「ぉ…かあさん？」
私は、下から上へと、目線をあげると、
「こら！雪菜！あんだけ今日は、早起きしとけって言ってたのに。馬鹿やろう。初日から遅刻するつもりか？」

昴の大きな声が、耳を唸らせる。
昴は、私の幼馴染。いつも、私の事をギャーギャー注意するのだ。
まったく。あんたは私の父親？って感じで…
「うるさいなぁ…。下で待っててよ。急いで仕度するから。」
私は、めんどくさそうに、そう言うと、昴はため息をつき、
「早く来いよ。カバンだけ、持っていっとくから。」
「いや、カバンはいいよ。てゆうか、別に先に行っててて…」
「いいんだよ。俺がお前と一緒に行きたいだけだから」
昴は、軽々しくそう言い、机に置いてあるカバンを取って部屋を出た。
ちょっとは、優しいとこもあるかなって…。そう、ボンヤリ机を眺めていたら、ある事に気づいた。
あ、筆箱！！入れるの忘れてたー！！
私は、机の引き出しにあるポーチを取り出して、シャーペン、ペン等いろんな物をポイポイと強引に入れた。
「昴！待って！筆箱！」
階段を降りていた昴を追いかけて呼び止めた。
昴は、フフッと笑い、
「天然。」
と言った。
私は、頭に血が上り、うるさい！と怒鳴って部屋に戻った。
ああ！早く準備しないといけないのに！ムカツク奴！
私は、強引に、制服をハンガーから取り、着替えた。
そして、階段を降りて、洗面所に向かい、バーッと顔を洗って歯磨いて、髪を梳いた。
「うぅっ！寝癖が！」
私は、ドタバタして、髪スプレーで必死に直していると、後ろから、
「もっと、丁寧に、髪はやらないと、傷んじゃうよ？」
上品な声とともに、白くて綺麗な肌の手の人が、私の寝癖を直す。
「お姉ちゃん！！先に行ってなかったの～？」

「うん♪これからは、昴君と、一緒に学校行けるでしょ？だから、一緒に行こうと思って」
「あぁ…。なるほど。」
「だから、雪ちゃん。協力よろしくね♪はぃ、寝癖直ったよ」
「ありがとー…。」
はーいと返事して、食卓に向かい、パンを取って玄関に向かった。
お姉ちゃんは、昴が好きだ。今は、新高校2年生で1つ年上。
ルックスも、性格も、とても、良い。
言わば、モテモテの人だ。
それなのに、なんてこの世の中は不公平なんだろう。
私は、ルックスも性格も普通のただの女。告白されたのも、1度2度…。
お姉ちゃんとは比べ物にならない。
私が、大好きな先輩も、お姉ちゃんに告白した事があるらしい。
まあ、お姉ちゃんは、私が先輩の事を好きって知ってたから、断ってくれたけど。
それに…。昴も、もしかしたら、お姉ちゃんが好きかもしれない。
両思い…。
そうだとしたら、私ももっと頑張らなきゃ。
先輩のハートをゲットしなきゃ！
私は、ギュッと握りこぶしを作って、ガッツポーズをした。
すると、後ろから、肩を掴まれた。
「何、1人でガッツポーズしてんの？」
「うふふ…。先輩のための、愛のガッツポーズよ」
私は、さっきまでの怒りは消え去り、笑顔で答えた。
「馬鹿だろ」
また、そんな発言を！！！
私は、また頭に血が上り、昴の持っている私のカバンを強引に取り、睨んだ。
「何よ！モテモテの人は良いよね～」

私は嫌味たらしく、言った。
「は？俺がモテる？」
昴は不思議そうな顔をする。
「え？アンタ、告白されたこと無いの？」
「いや、あるけど。」
「何回？」
「え…っと何回だっけ」
「数え切れないくらいあるんじゃん！それをモテるって言ってんの！」
「へぇ…」
昴は、まるで、今まで知らなかったように、いう。
まじかよ。
「昴は、頭良いし、スポーツ万能だし、顔も良いもんね～。まったく、あんたはかっこいいよね」
「え」
昴は、固まってしまった。
「え、何？何かいった？あたし。」
「俺の事、そんな風に見てたの？」
「え？えぇぇぇぇ！？」
私は、一気に顔が真っ赤に染まる。
しまった！！今、ものすごく失言した！かっこいいとか言ってしまった！！あああああ！
「い、いやいや、今のはさー…えーと…」
昴は、口を閉じてじっと私と見つめる。
すると、家から、人が出てきた。
「あ、あ！お姉ちゃん！一緒に学校行くんでしょ！！」
「は！？」
私は、話を逸らした。
昴は、一緒に行くということを知らなかったようで、驚いている。
「だ、だめかなぁ？昴君。一緒に行ったら。」

お姉ちゃんは、甘い声を出して、目をうるうるさせる。
「由美さん！その顔止めて下さい…」
「え！？ご、ごめんねぇ。ワザとしてるわけじゃ…」
見てて恥ずかしい会話。
私は、そそくさと、そこから抜けて、学校へ向かった。
「雪菜～！！待てよー！」
「雪ちゃーん！？手に持ってるパン、ちゃんと食べなさいよー！」
私は、パンをずっと握り締めていたようだ。
忘れてた…。
私は、もう、冷たくなっているパンを歩きながらゆっくりかじった。

「昴…。」

私はなぜか、胸が痛んだ。

1話　（後書き）

こんにちわ。作者の、城宝凛華です。
続けて生きたいと思うので、これからもよろしくお願いします。

2話

「意外と、近いんだよね～。青木高校」
私は、校門を、潜り抜け、有名進学校の青木高校に入った。
校舎は、新しく、とても綺麗だ。
自然も豊富で、中庭には、池がある。
中庭が見えるカフェテリアのような、食堂は、とても、おいしいと聞いた。
私と、高校生活を共に過ごすには、もったいなすぎるくらいだ。
私は、昇降口に入り、掲示板に貼ってあるクラス名簿を見る。

1組…。じゃないね。
2組…。でもないなあ。
3組…。…。あったぁ！！

「3組だぁっ！」
私は、即座に、3組のある3階まで、階段を1段抜かしで上り、3組の教室に向かった。
廊下も綺麗だなあ、と感じながらゆっくり、3組への廊下を歩いていると、
後ろから、髪の毛を掴まれる。
「痛っ！！」
私は、すぐに、髪を掴んでいる手を追い払い、後ろを向くと、
また、背の高いアイツ。
「昴～！！痛いじゃない！てゆうか、1組か2組か知らないけど、どっちのクラスも右の方！」
昴は、フッと鼻で笑い、
「俺も、3組だから、こっち。」
「えぇぇ！？またぁ？もう、アンタとは、腐れ縁だわ」

私は、小学生の頃から、ずっと昴と同じクラス。小学3，4年の時は違うかったけど。
私は、3組の教室へと、再び足を踏み出した。すると、昴も同じタイミングで、踏み出す。
「ついて来ないでよ！！」
「俺も同じクラスなんだから、しょうがねぇだろ」
昴は、澄ました顔でそういう。
こいつの、こういう余裕たっぷりの態度が、ときたまムカツク。
「昴のくせにっ…」
私はボソッと呟くと、昴は、こっちを見て、
「ばーか」

んかぁっっ！！！ふざけんなぁ！
昴は、教室へと、入り、さっそく、女子が、騒ぎ出す。
私は、昴が教室に入って、数秒たってから、入った。
彼女だって間違えられたら、とんだもんじゃない。
私は、教室に入り、黒板に貼ってある席順に座り、バッグを置いた。
すると、後ろから、ポンポンと肩を叩かれる。
私は、後ろに振り向くと、そこには、女子がいた。
普通…の女の子。
背は、私と同じぐらいかな。
「こんにちわ！うち、笹川春子って言うんだ。よろしくね」
「あ、あたしは、駒田雪菜。よろしくね」
私は、ニコッと微笑む。
すると、笹川さんも、微笑み返す。
新しい…友達かな？
「あの…あたし駒田さんのこと、雪菜ちゃんって呼んで良い？」
「うん！！あたしも、春子ちゃんって呼んで良いかな？」
「いいよー！やったぁ…。あたし、同中の人がいなくて、心細かったんだぁ。友達が出来てよかった」

「あ、あたしもだよー！あ、1人だけ、同中の人がいるけどね」
「え？誰ー？」
「んーとね…そこの、男子。」
私は、昴を指差した。
春子ちゃんは、昴に視線を向ける。
すると、春子ちゃんは、バッと視線を戻す。
「うっそぉ…。雪菜ちゃん良いなー！！あの人すっごく目立ってるよね。かっこよすぎ～」
「そ、そお？あたしは、別にかっこいいとか…」
あ、そういえば、うち、朝、かっこいいとか言っちゃったんだよね…。
ああ、思い出すと恥ずかしいっ。
「雪菜ちゃん？どうしたの？」
「ん？あ、いやいや、別になんでもないよー」
「そう？」
春子ちゃんは、少し、咳払いをして、私と、顔を近づける。
「あのさ、雪菜ちゃん…。彼氏っている？」
私は、いきなりの質問に、ガタッと椅子を動かす。
「い、いるわけないじゃん！」
「そっかぁ…。」
「春子ちゃんは？」
「実はねぇ、いるんだー…」
春子ちゃんは、顔を赤くして、言う。
何か、高校生って感じの会話。
私は、ちょっと温かい気持ちになる。
「誰？同級生？」
「実はぁー…先輩なの。ココにいるって聞いて、入学したんだー」
「わぁ！すごいね！」
「頑張ったよー…ココってレベル高いじゃん？雪菜ちゃんは、どうしてココに？やっぱ進学のため？」

「ううん。あたしも、春子ちゃんみたいな感じ。ココの先輩で、好きな人がいて、追っかけてきた。」
「おお！！頑張って！！」
すると、教室の廊下側の窓から、春ーって言う声がした。
どうやら、春子ちゃんの彼氏のようだ。
「あ、あれ、彼氏。ちょっと行って来るね」
私は、桃色だなぁー…と思いながら、春子ちゃんと、彼氏が、仲良くしてる姿を見つめる。
いいなぁー…って思ったり。
「雪菜。」
「ん？あ、昴。何？」
「何もない」
昴は、春子ちゃんの席に座り、伏せる。
私は、昴の頭をツンツンして、
「ワックスつけてるんだね」
「ん。まあね」
そんな、会話をしていると、他の女子が、コソコソと喋り始める。
しまった！！仲良いところを見せては駄目だ！
初日から、女子に、あーたらこーたら言われるのは勘弁だ。
「昴！！あっち行ってよ」
「は？何で」
「初日から、女子に嫌われるのは嫌なの！！」
「はぁ？何が、そうなるんだよ」
「アンタを好きな人は、もっといるの！あたしといたら、付き合ってるって勘違いされるもん」
「関係ねー…」
ぐっ。。コイツ！！何もわかってないなぁ…。
「お願い！！あっち行って！」
「あー、うるせぇ。分かったよ。意味不な奴だよな」
私は、堪えて、お手洗いに行った。

ああー…先が思いやられるよ…。

3話

高校に入学して、1週間経った頃、私は私だけの、秘密の場所を見つけた。
そこは、中庭の大きな木の真下だ。
日当たりが、よく、温かい。
しかも、見つけられにくく、サボるのには、最適な場所だ。
ていうか、サボった事ないんだけどね。
私は、昼休み、また、ココで昼ごはんを食べた。
購買に売ってある『いちごクリームチョコメロンパン』
意味の分からないパンだが、意外とおいしい。
人気もないから、すぐ買えるんだよね。
購買っていつも、人だかりできるから買うのに、手間かかるけど、
いちごクリームチョコメロンパンは、誰も手を出そうとしないため、
すぐ買えるというわけだ。
「いちごクリームチョコメロンパン…」
私は、ふと思う。
「名前長くない？略せないかなー…」
最近の若者は、すぐに略したくなる。
私も、最近の人になっているようだ。
「んー…。チョコメロンパンは、あるからダメだしー…。そうだ！！」
「ストロベリーメロンパン！！いいじゃんいいじゃん」
私は、1人で、納得して、パンを黙々と食べた。
すると、中庭の池らへんから声が聞こえた。
『あのー…。実は…』
かわいらしい女の子の声が聞こえた。
そっと、覗き見してみると、そこには、男1人と女子3人。
男1人を目の前に、女子3人いて、さっきのかわいらしい声の子は、

きっと真ん中の子。そして、その子の肩を持ちながら男をずっと見つめている左の女子。そして、また右の子も、堂々と、男を見つめている。
おおっ…！これは、告白現場！？
私は、ずっとその場面をそっと見る。
『あの…ね。私。アナタが好きです！！』
女の子は、体をもじもじさせながら、言う。
すると、沈黙が続く。
早く何か言えよ！男！
私は、心の中でそう言っていた。
そして私は、ずっとその男子を見つめる。するとある事に気づいた。

ん…？あれれ？あの男子…もしや…

昴！？

私は心を躍らせる。
これは、昴をいぢる良いネタではないか♪
私は一気にテンションが上がり、早く早くと、返事が待ち遠しくなる。
すると、昴が、手をズボンのポケットに突っ込み、頭をかきながら、
『ごめん。俺、好きな奴いる』
あぁ！？振っちゃったよ！あいつ！！
あんな可愛い子めったに巡り会えないよ！？
てゆうか、アイツ好きな奴いんの！？誰さー！
私は、心が、モヤモヤしはじめる。
『あの、昴君。好きな人って誰？』
おお！ナイスナイス！
言っちゃえ！昴！

昴は、息を吸って、呟く。
『駒田雪菜』
…。今誰って言った？え？駒田？雪菜？
私は、頭が混乱する。
嘘でしょ…？昴が私の事好きって？
私は、両手を顔に当てて、考える。
どうせなら、「由美」っていう名前を出してくれれば、スッキリしたかもしれない。
なんで？あたしなのさ…
私は、空を見上げる。
「聞かないほうが良かった…」
私は、そう呟いた。
『駒田雪菜って、3組の？』
『そう』
『あんな子のどこが良いの！？特別頭が良い事もないし、顔も、普通じゃない！』
『俺は、外見で、選ぶ趣味じゃないんでね』
女の子は、カァッと赤くなり、去っていく。
昴も、去っていき、中庭には、多分私だけしかいない。
「ばかぁっ…昴のばかばかばか！あたしは先輩が好きなんですぅー…」
私は、自分の太ももを叩き、呟く。
そういえば、先輩にあってないなー…
会えば、今の気持ちも晴れるかもしれない。
ちょっと、昴の言葉に心が揺れている私は嫌だ。
先輩が好きなのに…。おかしいよ。私。

消してよ…この気持ち…。

4話（前書き）

すみません。風邪を引いてしまい、2日ほど更新できませんでした。

4話

「ココが、2年の棟かぁ…」
私は、廊下を見回し呟く。
小奇麗にしてある廊下に、習字が、壁に貼り付けてある。
1年は、元々、校舎は綺麗だけど、掃除をしない人たちが多いから、廊下の隅にほこりが溜まってる感じ。
私は、2年2組を探す。
2年2組…。これを調べるのには、大変だった。
お姉ちゃんから、聞き出すのには、手間がかかりすぎた。
教えるかわりに1000円ね♪とか言われてしまった。
そんで、しょうがなく1000円を渡してしまったのだ。
1000円あったら、カラオケいけるじゃん！他にも、ジュース、お菓子買えるし…。
ぐあぁぁ。今思ったらもったいない。
でも会いたいんだ。

…。京助先輩に。

私は、2組を見つけ、走り出す。
2年生は、私にチラチラと視線を向けていたが、私は気にしなかった。
すると、後ろから、バッと腕を掴まれる。
私は、イカつい顔で振り向くと、そこにはお姉ちゃんがいた。
「もうっ！今、会いに行くとこだったのに…」
お姉ちゃんは、驚いた顔で
「何行ってるの！？ココは2年の棟！ちょっとは警戒したらどう？

締められるわよ」
私は、ハハッと笑い
「んな、漫画みたいなこと…」
私は、今、ある事に気づいた。
2年生の女子は、私を嫌な顔をしながら睨みつけ、男子は、私をニヤニヤして変態的な目で見ているのだ。
びくっ…
私は、鳥肌が立った。
ちょっと、目立ちすぎた？
ていうか、女子、皆ギャルっぽいし、怖い。
お姉ちゃんは、まだ茶髪で清楚なほうだけど、金髪の人も、いっぱいいる。
うあー！逃げ出したいよ～でも先輩に会いたいし！！
すると、後ろから、ボス的な女子が、コチらに近づいてくる。
すると、その女子は、お姉ちゃんの肩を持ち、
「由美。この1年どうしたの？」
大人っぽい声だ。
私は、まさにこの人がボスだと悟った。
でも、お姉ちゃんに対して、怒ってない？お姉ちゃんと仲良いのかな。
「うちの妹なの。ごめんね？勝手に入ってきて」
お姉ちゃんは、申し訳なさそうな顔をする。
ボスはニコっと笑って、
「由美の妹なら、別にいいわ。んで、この子は、なんて名前？」
別にいい！？私はその言葉に驚いた。
お姉ちゃんってそんなに信頼されてるの？
私はお姉ちゃんに深く感謝する。もう少しで締められるとこだった。
お姉ちゃんは、ありがとうと言って、
「雪菜よ。雪菜、この人は、美佳っていうの。」
「そう。雪菜ね」

すると、美佳さんは、手をバッと上げた。
すると、後ろ、前、横から、ガタガタという足音が聞こえた。
そして、お姉ちゃんと私の前に並んだ。
そして、美佳さんは、大きな声で、
「この人は、由美の妹。雪菜よ。みんな、メルアドと挨拶をして」
すごい、人数だ。ほとんどの2年女子が並んでいる。５０人程度だ。
私は、この光景が夢のように思えた。
すると、１人１人、私に深々と礼をして、メルアドの書いてある紙を渡す。
お姉ちゃんは微笑みながら、ありがとうと言う。
私は、何も言わずにただボーッとして紙をもらう。
ていうかお姉ちゃん、本当に何者!?
私は、１０分程度で、紙を全てもらい、お姉ちゃんに、１年の棟にもう、戻りなさいって言われて戻った。
私は、教室につき、椅子に座りただボーッとする。
もうすぐでチャイムが鳴る時間にも関わらず、昴が、私に近づいてくる。
「何、ボーッとしてんの？いとしのアナタに会えた？」
私は、昴の声も耳に入らず、ボーッとする。
すると、昴が口と鼻を塞ぐ。
すると、息が苦しくなり始める。
私は、意識が戻り、ハッとする。すると、私の口と鼻が塞がれ息が出来ていないことに気づく。
「んがっ！！」
私は、昴の手をバッとどける。
「く、くるしかったぁ…」
私は、息を荒くする。
「まったくよ、何ボーッとしてんのか聞いてるのに無視しやがって」
「え？ごめん。聞こえてなかった」
昴は、ハァと溜息をつき、

「で？会えたの？」
「え？」
私は、一瞬、何のことから分からなかった。が、思い出す。
「あぁぁぁぁああ！！忘れてた！！先輩に会うはずだった！！」
「はぁ？」
昴は、不思議そうな顔で、呟く。
「あぁぁぁぁぁ。昼休み行くしかないかぁ…。」
「ふーん。」
すると、チャイムが鳴る。
皆、一斉に席につき、昴も席につく。
私は、４時間、ずっとボーッとしたまま過ごした。
食事の時間になり、手を洗いに行く。
手を水でササッと洗いハンカチのあるポケットに手を突っ込む。
すると、紙が、ドサッと入っていた。
「忘れてた…」
これ、全部携帯に入れないといけないと思うと、吐き気がする。
「めんど…」
私は、紙を、違うポケットに入れ替えて、購買に行く。

私はまた、あの、秘密の場所でまったりストロベリーパンを食べる。
そして、ふと思う。

昨日、あんな話聞いてしまったのに、昴と普通に喋れた…。
しかも、昴も普通にしてたし。
あの事を思い出すと頬が真っ赤に染まった気がする。
なぜ、昴は、私の事を好きなくせに、普通でいられるのだろう。
きっと、私なら無理だ。
いや、もしかすると、昴も意識しながら話しているのかも。

そう考えると昴が可愛く思えてくる。
私は思わず、笑ってしまう。
「あはっっ。昴がねー…ふふふ」
幼馴染の、好きな人を知れたのは、少し嬉しいかもしれない。
それが、私ってのは複雑だけど。
私、昴のこと全然、知らないんだなぁ。と思う。
なぜか、『昴』についてもっと知りたくなる。
そんな事を考えながら、食べていると、後ろから、声がした。
「あれ？雪菜？」
私はその声を聞いてビクッとする。私はすぐ誰かが分かった。そっと後ろを向くと、
そこには、私の好きな人『宮田京助』がいた。
京助先輩とは、中学時代にあった。私は中3で先輩は高1だった。
お姉ちゃんが家に時々連れてきていた。連れて来てくれる度、少し話したのだ。
まあ、お姉ちゃんは、いつも、色んな人を連れてきてたから色んな人と会ったけど、唯一印象に残ったのが、先輩だった。あの笑顔が、しぐさが、言葉が、好きに思えてたまらなかった。そして、先輩をずっと思い続けた。
「せ、先輩っっ」
私は、後ずさりする。そして顔が真っ赤になっていくのが分かる。
「もしかして、ココでいつも昼食べてるの？」
京助先輩は微笑み、言う。
私は、ドキッとして、鼓動が早くなる。
私はなかなか、声が出ず、やっと勇気を出して、声が出た。
「ひゃい！！」
か、噛んだー！！！！
さらに顔が真っ赤になり、ストロベリーパンが、地面に落ちる。
「あ、パン！」
「あ、す、すみませっ」

先輩は、サッとストロベリーパンを取り、砂がついた部分をちぎる。
「これで、食べれるでしょ」
「あ、ありがとうございます…」
私は、先輩の顔を見れずに、下に俯く。
「俺も、ココで食べて良い？」
先輩と一緒にご飯！？
嬉しすぎる。私は、コクンと頷く。
先輩はフッて笑って、横に座る。
かすかに触れる腕が、とても熱く感じた。
時間が止まっているように思えた。
沈黙が続き、先輩と私は黙々とパンを食べる。
すると、先輩が、口を開く。
「今日の朝休み2年の棟に来てたでしょ？」
「え、あ、はい」
私は、照れながら答える。
「すごいよね。君のお姉さん。あの美貌で、もう、女子の中心だよ」
「え？中心？」
「あれ、知らないの？由美さん、女子のボスなんだよ。いつも率いてるね」
「えぇぇ！？お姉ちゃんが！？」
私は、思わず、手が止まる。
京助は驚いた顔をしてから、ニコッと笑う。
「君のお姉さんはすごいと思うよ。」
私は、少し、お姉ちゃんが、憎く思えた。
京助さん、褒めすぎだよ。
「あの…先輩も、お姉ちゃんの事、綺麗って思うんですか？」
「うん、思うよ。男子からもモテモテだよね」
私は、バッと先輩の方に体を向けて、
「あのっ！！もしかして、先輩、お姉ちゃんの事好きなんですか…？」

京助は、驚いて、
「えっ！？」
と声を出す。
私は、泣きそうになってしまう。
こんな顔を見せないために、私は、下に俯く。
すると、風が、雪菜の髪を揺らし、静けさを現そうとする。
先輩は、沈黙をやぶいて、
「俺は、他に好きな人がいるよ。由美さんじゃないけどね」
その言葉に、私は、顔を上げる。
お姉ちゃんじゃないって事が分かっても、やっぱり辛い。誰なんだろう…。
「好きな人って誰ですか…？」
私は、先輩の目を見つめながら、言う。
すると、先輩は、目を逸らして、顔を赤らめる。
「ごめっ。そんな見られたら恥ずかしい」
私はバッと、後ろに下がる。
「す、すみません」
私は、しまったぁー！！と心の中で叫ぶ。
「そのうち、分かると思うよ」
そういい残して、先輩は去っていった。
ちょっと、顔を赤らめたところが可愛かったかも。
このヒミツの場所に感謝をする。

5話

この前、あのヒミツの場所で、先輩と喋ってから、先輩は、よくあの場所に現れるようになった。
とても近づいた気がする。
今、その場所に向かおうとしている。
昼休みの時間は、いつも、あそこで、先輩と話すのだ。
最近、先輩と話すのも、慣れてきて、友達感覚のように、喋れるようになった。
でも、実際、いつもドキドキしながら喋っている。鼓動は、一向にゆっくりになる気配はない。
そして、行ってみると、
先輩が、本を読んでいた。
「こんにちわっ京助先輩」
「おっ、雪菜っ」
先輩は、本を閉じて、パンを食べ始めた。
「何の本ですか？」
「んーとね、歴史小説」
「ほぉ…。私、歴史は、苦手です…」
「はは。面白いじゃんか。昔でも、恋愛とかのは、すごく面白いよ」
「恋愛っ！？そんな小説あるんですか？」
「ん、まあね」
先輩は、笑顔で、答える。
そして、私も、ストロベリーパンの袋を開けて、一口食べた。
「んふっおいしぃ」
私は、食べながら、笑顔で呟いた。すると先輩が、ストロベリーパンを指差して、
「いつも、それ食べてるよね」
「はぃっ、おいしぃんですよ～これが」

「購買で、いつも、端っこに置いてある奴でしょ？」
「知ってるんですか？」
「うん。まあね」
「知ってる人少ないんですよー！」
「雪菜が、よく買ってるの見てたからね」
「え？見てた？そうなんですかっ」
先輩は、一気に顔が赤くなる。私は、手を止めた。
「いや、俺が買いに行くとき、よく見かけてたから…」
先輩は、照れながらそういう。
なるほどっ。納得。
「そっかー！」
私は笑顔で、またパンをかじった。
いつの間にか、この場所は、先輩と私だけの場所になっていた。
他愛もない話で、いつも昼休みを過ごしている。
隣に先輩がいる事は、とても心が緩やかになった。
「そういえば、先輩、告白された事あります？」
興味本心で、聞いてしまった。
最近、先輩のことが知りたくてたまらないのだ。
趣味や特技。誕生日も全て知り尽くしたいという気持ちが芽生えてきている。
先輩は、また顔が赤くなり、ゴホッて咽てしまった。
「大丈夫ですかっっ！？」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ。ちょっと咽ただけ」
「す、すみません。変な質問して」
「いや、いいんだよ。…あるよ。されたこと。４０回ぐらい…」
「よ、よ、よんじゅっかい！？ごほっごほ」
今度は、私が咽てしまった。
「す、すごい！！」
やっぱり、先輩は、モテるんだなぁ…。すごい人と、私喋れてるんだ…。

「照れるなー。雪菜は？」
聞き返されてドキッとする私。
体制を崩していたのを戻して、
「えと…。ですね。」
「ん？」
「んーっと…」
「あるの？」
「いちおー…あるんですけど…。」
「おおっ！何回？」
「2回です…」
「すごいじゃん！！2回でも！」
「先輩とは比べ物にならないですよー」
すると、先輩は、微笑みながら、私の頭を撫でて、
「比べるものじゃないでしょ。ちゃんと好んでくれる人がいてくれるって事だけで十分じゃん」
先輩の手は、とても大きくて、温かかった。
いつも、私は、先輩に教えてもらうことばかりで、申し訳ない気持ちになった。
すると、私は、良い案を思いついた。
「あ、もう、こんな時間だ。いかなきゃ」
「あ、先輩っ！ちょっと待ってください」
「ん？」
「あの…先輩、いつもパンでしょ？」
「うん」
「私、明日作ってきます！！ちょうど、明日、久しぶりに弁当作ろうって考えてて…」
「本当？」
「はいっ！！」
「じゃあ、頼もっかな。よろしくね」
「はい！ぜぇぇぇったい、おいしいの作りますから！」

そういって、手を振り、別れた。
恩返し出来ると思うと、やる気がぐんぐん湧いて来た。
明日、絶対おいしいの作って、先輩に喜んでもらおう。
先輩の喜ぶ姿が、目に浮かぶ。
明日が楽しみ♪

6話（前書き）

2月になりましたね。
今月も、読んでいているかたがたのため、頑張りたいと思います。

6話

「明日は、雪菜の弁当だよな…」
明日、俺、「京助」は、雪菜っていう後輩に弁当を作ってもらう約束をした。
すっごい楽しみだ。
俺は今、部活を観賞中。
その部活は、弓道部。弓道部には、俺の好きな女子がいるのだ。
中学時代から、ずっと好きだった。
明るくて、天然っぽいとこが、大好きだ。
それに、俺は、いつも周りの女子から遠い目で見られているのだ。
だから、こんな俺を、普通に接してくれる彼女が好き。
1つ年下のため、俺は、高校2年で彼女は高校1年。
だが、運命的に、俺と同じ高校に入ってくれた。
とても嬉しかった。
言っちゃ悪いが、彼女は、そこまで頭が良くない。
けど、このレベルの高い新学校に入ろうと決意してくれた。
だから、猛勉強していたらしい。
俺の高校に、めちゃくちゃ頑張って合格しようとしている事を、由美から聞いた時は、すごく、感動した。
さらに好きになった。
あいつの事を思うと、胸がドキドキする。
そして、最近、あいつのよくいる場所を見つけた。
そこに、俺も度々行くようになり、いつも昼休みは、そこで一緒に食べている。
そこで、他愛のない話をしているのだ。
学校を行くのは、今まで、勉強をしにいくためとしか思っていなかったが、最近は、アイツに会うために学校に行ってるって感じがする。

あいつと話していると、楽しくて、心が優しくなっていくのだ。
でも、最近、思う事がある。
あいつは、きっと幼馴染の「昴」って奴の事が好きなんだなって感じることがあるのだ。
いつも、昴って奴とばっか喋ってる姿が目にかかる。
たまたま、1年校舎を通るときも、あいつと昴が仲良くじゃれあっている姿を目にした。
昴は、顔も良いし、運動神経も良いし、頭も良いからモテるって聞いた事がある。
好きになっても、違いはないだろう。
俺は、あいつに振られる運命なのだろうか？
いや、まず告白しないかも、しれない。
告白するなら、何度でもチャンスはあるが、勇気がでない。
振られたら、今の状態とはおさらばだ。
それが嫌なのだ。
そして、俺は、ある事を今願っている。
最近、あの噂を聞いたのだ。
『駒田由美が、1年の昴って奴の事、好きらしいぜ』
っていう噂を。
昴と、由美が付き合ってくれさえすれば、気持ちが楽になる。そう思うのだ。
でも、例え、昴に彼女が出来ても、あいつが俺の彼女になるって確定はない。
あいつは、可愛いし、きっと、これから、もっともっとモテるだろう。
そんな事を考えていると、足音が、俺の近くに来るのを察した。
「京助せーんぱい！何ボーッとしてるんですか？」
雪菜だ。俺の好きな奴…。
「いや、雪菜頑張ってるなぁっと思って」
「あはは。照れますよー！頑張ってるっていうなら、昴とか、お姉

ちゃんですよ」
「そう？」
「はい。お姉ちゃんは、昴の腕に追いつこうとして頑張ってます」
「確かにね。でも雪菜も十分頑張ってるように見えるよ？」
「ありがとうございます。先輩も、部活入ればいいのに」
「いや、俺は、勉強とか忙しいし。親が、部活には反対なんだ」
「そっか…。」
「大丈夫だからね。あ、それより、弓道部の、服カッコ良いよね」
「そうですよね！私も、この服に憧れて入ったんです」
「へぇ」
「あ、先輩、今日は、どうしたんですか？何か用ありました？」
「ううん。一緒に帰ろうと思って」
「え！？お姉ちゃんと！？」
なぜ、由美と…；俺は、ははっと笑って、
「雪菜とだよ」
「え、えぇぇぇぇ！？あ、あたしと？良いの？」
当然。たまには、一緒に帰って、もっと親しい関係になりたいと思うのだ。
昴みたいに。
俺は、コクンと頷く。
「ちょ、ちょっと待ってください！すぐ着替えてきます」
雪菜は、慌てて、更衣室に向かう。
そして、3分程度たち、走ってきた。
「お、お待たせです」
「じゃ、帰ろうか」
そう、言うと、後ろから、
「あれ？雪菜、帰るのか？」
ああ…。あの例の昴だ。
雪菜は、笑顔で、
「うん。お先に失礼♪」

「そっか。じゃあな」
すると、今度は、由美が、こっちにきて、
「じゃあ、昴君、今日は、私と帰ってね♪」
と言った。
やっぱり、由美は、昴がすきなのか。
まあ、美女美男でお似合いじゃん。
っていうか、「今日は」って、もしや、いつも、雪菜と帰ってたのか？
じゃあ、姉妹で昴の取り合いか。
修羅場まで行かない事を願おう。

そして、今日は、雪菜と、また、他愛のない話をしながら帰った。

7話

「そっか、じゃあな」
俺は、雪菜に、手を振った。
雪菜は、先に、部活を終わるっぽい。
雪菜は、どうやら、雪菜の好きな奴「京助」って奴と一緒に帰るらしい。
俺、「昴」は少し、やきもちを妬いているのかもしれない。
俺は、雪菜の事が好きだ。
小さいときからずっと。
でも、雪菜はちっとも、俺の事を男として見てくれない。
京助が、少し羨ましいのだ。
きっと、京助も、雪菜の事が好きなのだろう。
両思いか…。幸せにな。
それにしても、雪菜の姉、「由美」が最近うっとおしい。
ずっと、ベタベタしてくる。
ルックスは良いのだが、俺は、決して好きじゃない。
好きか嫌いかと聞かれたら、もしかして、嫌いと言うかもしれない。
うっとおしい女は嫌いだ。

ああ。最近雪菜と喋ってねーな。
喋りてぇ。
昼休みも、最近全然教室にいないし。
多分、京助と会ってるんだろう。
もしかして、もう、デキちゃってるとか？
ありえるー…。
てゆうか、俺もいい加減諦めないといけないのだが。
叶わないし。
告白する勇気もない。

どうせ、告白したって、「えー？嘘ー？」
で終わりそう。
今度、雪菜を、水族館にでも誘うか。
そうすれば、話す機会なら、できるだろう。
あいつ、水族館好きだし。
そんな事を考えていると、もうすでに制服に着替えた由美が、話しかけてきた。
「早く♪一緒にかえろ？」
ああ、めんど。
「はいはい」
俺は、マイペースに更衣室に向かった。
2年女子のボスのお誘いを断るとめんどくなるから、しょうがなく一緒に帰る。

「あのね、昴くん、雪ちゃんと、京助くん、お似合いだと思わない？」
由美が、帰り途中に、直球質問。
はぁ。
「そおっすね」
俺は、適当に答える。
「じゃあさ、応援しようよ」
はぁ！？俺が応援？
「無理っすね」
俺は、即座に断る。そんなめんどくさい仕事、やってられっか。
「なんでょぉ？」
「だって…」
急に、俺の足と言葉が止まる。
めんどくさい…？いや、そんな理由じゃない。

めんどくさいが理由じゃないんだ。
そうだ。俺は、雪菜が好きだから応援ができないんだ。
「だって？」
由美は聞き返す。
「だって…めんどいし」
俺は、ごまかし笑いをする。そして、また、歩き始める。
ちょっと不自然だったかな。
「昴くん、おかしいよ？なんで止まったの？」
そうだよ。俺はおかしい。
「え？おかしくなんかないっすよ。ふつーふつー」
ああ、不自然すぎる。
なんだ、この演技力のなさは。
「昴くんさ、もしかしてだけどね？もしかしてだけど…」
俺はドキッとする。そして、次、一番言われたくない言葉が由美の口から出た。
「雪ちゃんが、好きなの？」
ああぁ…。どうしようもなくなった。
俺は、目の前の世界が、灰色に見えた。
2人とも、足を止め、沈黙が続く。
そして、由美が、声を出す。
「そうなんだ…。薄々気づいてたけど…」
俺は、じっと、由美を見つめる。
由美は、俯いている。
すると、由美が、パッと俺の方を見て、口を重ねる。
分厚くて、温かい唇が、俺の唇にキスをする。
俺は、何も考えられなくなる。
一瞬の事だった。
俺は、よける間もなかった。
俺はただ呆然とする。
「ごめん。あたしね、昴くんが、大好き。雪菜の代わりで良いから、

付き合わない？」
俺は、返事が出来なかった。
あまりの、展開の速さに。
「良いのなら、今度は、昴くんから、キスして？」
そういって、由美は目を閉じる。
良いのか？ココでキスをして。
でも、いつかは、雪菜を諦めなければいけないのだ。
ちょうどいいのかもしれない。由美には、悪いが、俺は絶対お前の事を好きにはならない。
ただ、雪菜の代わりなんだ。代わり…。いつか、心に余裕ができたら、別れて、そのまま一人で生きていこう。
俺は、そう、心の中で念じながら、キスをした。
そして、舌を巻き入れ、由美の口の中で、暴れる。
「…っんっ」
由美は、甘い声を出す。
俺は、由美が、声を出した途端に、唇を離した。
お前じゃない！！お前の声じゃないんだ！
俺は、とんでもない事をした事に気づく。
お前の声なんて聞きたくないんだ…。
雪菜の声が欲しいのに…。
やっぱり、雪菜じゃなくてはダメなのだろうか。
俺は、かがんだ。そして、激しく後悔する。
由美が、俺の異変に気づく。
「大丈夫？どうしたの？」
「ごめん…。俺、やっぱ無理…。雪菜じゃないとダメなんだ…」
「無理矢理させてごめん。代わりと思ってくれれば…」
「だから、ダメなんだ！由美の声が聞きたいんじゃない！俺は雪菜の声が良いんだ…」
俺は、思わず大きな声を出してしまう。
由美は、驚いた様子で、俺を見る。

俺は、立ち上がり、
「ほんとごめん」
そういって、足早に、家に帰った。

8話

「私、実はね…。昴に、告白したの…っ」
お姉ちゃんは、私の部屋に入って来た直後に、私の前で泣き崩れる。
私は、いきなりの事で驚き、私は、思わず、勉強していた問題集を床に落とす。
私は、すぐに我に戻り、問題集を机に置き、お姉ちゃんの背中をさする。
「どうしたの？昴に告白して、どうなったの？」
私は、昴の返事は、大体分かるものの、とにかく、聞かずにはいられなかった。
だって、昴は、私の事が好きだって言ってた。
OKするワケがない。
すると、お姉ちゃんは、そっと顔を上げて、
「振られちゃった…。その理由がね…」
「うん…」
「雪ちゃんの事が好きだから…って」
やっぱり。予想通りだった。
私は、この事は言わずにただ、じっとお姉ちゃんの話を聞く、
「そっか…」
「それで…」
「うん」
「私、雪ちゃんの代わりでも良いからって言ったの」
そんなに、昴の事が好きだったんだ…。私は、お姉ちゃんの純粋な心に泣き出しそうになる。
まるで、とあるドラマのようだ。
「それで、私、キスしたの…。」
私は、キスという言葉にビクッと反応する。
キスを…した…？昴は、お姉ちゃんとキスをしたの？

「私…、もしも、良いなら、今度は昴からキスをしてって言ったの」
さすがに、しないよね。私は、ごくっと唾を飲み込む。
「そしたら、昴は、キスをしてくれたの…長かった。とても」
え…。
昴は、お姉ちゃんにキスを…？
なんで…
「それで、OKなんだって思って、気持ちが舞い上がって、ちょっと声を出しちゃったの」
どんなに、嬉しかったことだろう。
でも…
「そしたら、お前の声じゃないんだ！俺は雪菜の声が良いんだって…」
昴…
ダメだよ…。キスなんてしたら。取り戻せないじゃん…
ばか…。
私は、涙ぐんでしまった。
「ねぇ、雪菜。お願い。昴だけとは付き合わないで欲しいの」
「え…？」
「雪菜は、京助の事だけ思ってて欲しいの。こんな事で揺るがないで…。私は、まだ、諦めないから。これからも、もっと応援して欲しいの」
私は、意外な言葉に、驚く。
まだ、頑張るんだ。
諦め強いんだな。
私は、お姉ちゃんをもっと尊敬した。
私はそっと頷いた。

「雪菜、おはよう」

京助先輩が、教室のドアのところで、何か言いたげにしていた。
「あれ？どうしたんですか？1年の棟まで来て」
「いや、ちょっと、1年の風紀委員会に用があって」
「あぁ、この前決めた委員会ですか。」
「うん、風紀委員会っているかな？」
「あ…」
「ん？」
「あたしと昴だ…」
私は、ガクッと首を下げる。
「あはは。そっか。じゃあ、ちょっと昴くんも呼んでもらっていいかな？」
「あ、はい。ちょっと待っててください」
私は、急いで、机で寝ている昴を起こす。
昴は、ふぁぁぁとあくびをして、目を覚ます。
「もうっ、風紀委員会だってさ。早く！」
私は、昴の腕を引っ張り、先輩のとこまで引っ張って行く。
「なんでしょうか」
昴は、眠たそうに言う。
そんな昴の足を私は思いっきり踏みつけた。
昴は、ハッとぱっちり目を覚まし、こちらを睨みつける。
そんな昴を私は無視して、笑顔で、先輩の顔を見る。
「えっとね…明日の昼休み、ちょっと2ー2に集まって欲しいんだけど」
「了解でっす」
私は元気よく答える。
昴は、礼儀正しく、頭を下げる。
「じゃあね。雪菜と昴くん」
「はい」
「はぁぁぃ」
私は、先輩に手を振り、さよならすると、席に戻った。

そして、後ろの友達と喋る。
「嬉しいなぁ…朝っぱらから先輩と会えるなんて♪」
「よかったね♪雪菜ちゃん」
「うん」
話をしていると、後ろから、昴が私の腕を掴み、屋上まで引っ張ってゆく。
いきなりなんなのー！？
「はーなーしーて！！」
私が、そう叫ぶと、パッと昴が手を離した。
屋上…。始めてかも。
「あのさ、お前、京助先輩とできてんの？」
いきなりの質問に私は、ゴホッとむせた。
私が、京助先輩と！？とんでもない！！
まあ、そうなりたいんだけどね…
「まだよ！」
私は、そういって、後ろを向く。
「そっか」
昴は、立ち去ろうとする。
何よコイツ。私は、ある事に気づく。
そうだ。一回、私の事を本当に好きなのか、聞いてみよう。
もしかしたら、私の事じゃなくて、他の人の事かも…。
それにちょっと興味があるのだ。
昴のことに。
私は、ドアを開けようとする昴に、
「あのさ、昴って…あたしの事好きなの？」
私は、勇気を振り絞って、聞く。
すると、沈黙が続く。
そして、昴が、こっちに向かってきて、
私を、バッと壁に押す。
「好きだけど？」

冷めた感じで言う。
何コレ…。
ちょっと、昴！！待って！！
私は、焦って、動けなくなる。
「お前は、どうせ、京助先輩の事が好きなんだろ？」
その通り。
なんだけど…。言葉が出ない。
私は、精一杯声を出そうとする。
私は、声を出さないで、首を立てに振る。
「そうだよな。お前は、いつも先輩、先輩って…」
昴は、私から目を逸らす。
「昴…」
すると、昴は、私の口を奪おうと、顔を近づけてくる。
やめて！！お願い…。
私は、思わず目を瞑る。
すると、温かいものが、私の唇に触れる。
顔も、昴の腕で動かせない。逃げられない…。
昴は、唇を離して、また、唇を重ねようとする。
私は、昴がもうちょっとでまた、私の唇が重なるってところで、
「お姉ちゃんをもっと見てあげてよ！！！」
すると、昴は、動きを止める。
昴の頬に涙が伝う。
私は、ただ昴を見つめる。
「ごめんね…昴。でも、昴には、お姉ちゃんが似合ってる。それに、アタシは、先輩の事は本気で好き。あたしと昴じゃ、成立しないんだよ」
そして、私は、昴の頬に流れる涙を手ですくう。
昴は、赤い頬で、私を見つめる。
そして、昴は、私の右肩に頭を下ろす。
「雪菜…。大好きだ。だから、俺は、お前の幸せを祈るよ。」

「ありがとう。昴も、幸せになってね」
「おう。それでさ、雪菜。京助先輩は、きっとお前の事が好きだと思う」
「え？」
「じゃあな。俺、ちょっと顔洗ってくるわ」
そう言って、昴は、出て行ってしまった。
先輩が、私の事を好き？
まさか・・・。
私は、壁にもたれる。

「あっ、先輩」
「あ、昴くん。どうした？」
「えっとですね。」
昴は、京助の、耳元で、
「実は、ごにょごにょごにょごにょ…」
京助は、ハッとする。
すると、京助は、走り出して、あそこに向かう。
「雪菜、良かったな」
昴は、そっと呟いた。

「今日は良い天気だなぁ」
能天気に、壁にもたれかかったままの、雪菜。
すると、いきなり、ドアがバンッと開く。
「え？」
「はぁ…はぁ…」

「ど、どうしたんですか？先輩」
京助は、笑顔で、
「雪菜、俺の事が好きって本当？」
「えっ！？」
嘘…。こんなのって…。
私は、驚きながら、そっと頷く。
すると、先輩は、私に抱きつく。
「俺も、雪菜の事、好き…」
うそぉ…。昴かな。。。ありがとう…昴。

本当に嬉しい。昴くんありがとう…。両思いだったんだ…。
あの時、”実は、雪菜って、あなたの事が好きなんですよ。今、屋上にいます。行って上げてください”
感謝するよ。昴くん

「先輩…」
「その先輩って止めてよ。京助で良い」
「えっ…きょ、京助…」
私は、顔が真っ赤になる。
嬉しい…。今までの人生の中で、一番嬉しいかもしれない。

そして、私は、そっと京助と唇を交わした。

9話

「きょ、京助…おはよぉ…」
私は、赤くなった顔を手で隠し挨拶をする。
京助は、フッと微笑み、大きな手で、私の頭を撫でる。
「いちいち俺の名前呼ぶとき、照れるなよ。こっちが照れるっての」
京助は、私の手を掴んで、握る。
「恋人なんだから、当然だよな？」
私は、またさらに、赤くなって、
「うん」
と微笑んだ。
今日は、京助がいつも登校時に降りる駅で私と待ち合わせして、学校に向かった。
恋人になって初日はやっぱり照れる。
学校に着き、京助は、私の教室まで着いてきてくれた。
皆の目線は、私たちに向けられる。
ひそひそ話している女子が気にかかったが、気にしない事にした。
「ありがとう。京助」
私は、ニコッと笑い、手を振る。
京助も、笑顔で答える。
「じゃあな。今日も昼休み、あそこだからな！」
「うん！じゃあね」
私は、手を振り、自分の席へと向かった。
昴は、もう、来ているようだ。
昨日の事もあって、ちょっと気まずいと感じてしまう。
本当は、感謝しなければならない。
今、京助と付き合えてるのも、全て昴のおかげだ。
私は、ただ、ボーッと椅子に座っていたら。
人影が、私に向かってくるのが分かった。

「雪菜」
あ…。
「昴…」
私は、お礼を言わなければならないと思い、言おうと、椅子を立とうとする。
「良い。座ってな。俺が勝手に話に来ただけ。お礼とか良いから。てゆうか、お礼より、謝らなければならないんだけど。俺」
謝る？昴が…？私は疑問に思い、昴に聞く。
「何を謝るの？昴は、何も悪い事してないよ？」
「いや…あのさ。ほら、昨日、○○しちゃったじゃん？それ、あの、気持ちが高鳴ったってゆうか…。だから…。ごめん…」
「○○？」
私は、未だに何を言っているのかが分からない。私は聞き返す。
「だから、ほら、あの…○○だよ」
「何なのさ！○○って！」
昴は、カァッと顔が赤くなる。そして、息を吸った。
「だーかーら、キスだよ！！！！」
「！！！」
私は、ビクッとする。大きな声出しすぎ…！！！
教室にいた皆が、こっちを見つめる。
私は、バッと顔を伏せる。
そして、昴も、気づき、バッと背をかがめる。
私は、小声で、
「バカ！！何、大声で言ってんのよ」
「お前が理解しねーんだもん」
「しょうがないなぁ…。それで、キスの事は、もう良いから」
「え？まじでか？」
「うん。その代わりに、くっつけてもらっちゃったし」
「そっか…ごめんな。本当に。初キスだったんじゃね？」
「うっ…。そうだけど…。京助とのキスを初キスって事にする」

「えっもうキスしたのか？」
「ん、まあね。屋上でちょいとね」
私はニヤッと笑う。
「よかったじゃん」
「うん、全部、昴のおかげ。感謝してる」
「おう」
「あ、もうそろそろ、チャイムなるよ。早く、席につきなよ」
「はーい」
昴は、席につく。
それと同時に、学校にチャイムが鳴り響く。

１０話

「それでね、今日、昴にお礼言っといたんだー！」
私は、京助に笑いかける。
昼休み、いつものところで、二人、のんびり昼食だ。
「へぇ。確かに昴のおかげだね」
「うん。もう、昴良い奴だよね」
「うん」
「もう、１２月だよね。来年のバレンタイン昴に義理チョコ渡そっかな」
私は、笑いながら、そう言うと、京助が、いきなり私の、腕を掴み、
「俺は？」
私は、ハッとする。
「ご、ごめん。当然、京助にも渡すよ？」
「本命？」
「と、当然じゃんかぁ！」
私は、笑いながら、答える。京助は、私を真剣な目で見て、
「目、閉じて」
私は、驚きながらも頷いて、目をゆっくり閉じる。
すると、なぜか、私は、震えがとまらなくなった。
京助は、顔を近づけてキスをしようとすると、雪菜の異変に気づく。
「なんで、怯えてるの？」
私は、ビクッとする。
私が、そっと目を開けると、目の前に、辛そうな顔をしている京助がいた。
「どうしたんだよ。雪菜。おかしい」
私は、涙腺が緩んで、涙が溢れてくる。
あれ…？何でだろう。
何が悲しいの？

私は、京助をすごく傷つけた事に気づく。
「ご…ごめん。なんか、急に怖くなって…」
「怖い？」
「わかんない…。なんでだろ…。涙が…止まんないよぉ…」
私は、目から出てくる涙を、必死に止めようと、手で拭く。
「目元が真っ赤になってる。あんまり、キツくこすらないほうがいい」
「ごめん…ごめんね京助」
「良いから。何があったの？昴と何かあったのか？」
「あの…あのね…。あたし、昴にキスされたのっ…。それで、今日、謝ってた。昴が…キスしてごめんって。でも、あたし、昴のキスは無かった事にした…悲しかった…」
京助は、私の涙をハンカチで拭いている手がピタッと止まる。
「嘘…だろ。なんで悲しいんだよ」
「ごめん。この前、屋上で、昴に、好きだって言われて…。キスされた…っけど、密かに嬉しいって思ってたあたしがいたのっ」
「それって…雪菜は、昴が好きって事か？」
「だけどっ…京助も好きなのっ！もうわかんないょぉ…自分で自分がわかんないのっっ」
私は、泣き崩れる。
涙が、どんどん増してくる。自分の情けなさのために流れているのかもしれない。
分かってたんだ。最初から。昴が好きって気持ちが密かにある事が。
でも、その気持ちを消そうとしてた。
「俺と、昴だったら、どっちが大事？」
「ど、どっちも大事…」
京助は、ゴホンッと咳払いして、
「じゃあどっちの方が好き？」
私は、答えが出なかった。
どっちも五分五分に好きなのだ。

「答えられない？」
雪菜は、もうすでにいつものような、明るい目は消えていた。
私は、そっと頷いた。
京助は、微笑み、私の頭を撫でながら、
「じゃあ、距離を置こうか」
「…え？」
「このままでいても、雪菜は、苦しむだけだろ。ちょっとは、選ぶ機会与えないとな」
「いいよっ別れなくて！！」
「お前は、自信あるのか？自分は、大丈夫だって。昴への気持ちを消すって」
「…。」
「だろ？じゃあ、距離を置こう。まあ、俺は、お前の真の好きな人になれるように、アタックするけどな。昴にも、伝えとく」
京助は、立ち上がり、校舎の中に入る。
あぁ…せっかく、念願の京助と付き合えたのに。なんなのさ。一日で、揺るぐなんて。
雪菜のばかぁっ。
てゆうか、なんで、言っちゃったんだろう。隠しとけば、こんな事には…。
どうしようもないなぁ…。
私は、自分で、自分の頭を一突きした。

「すみませーん。昴くん、ちょっといいかな？」
京助は、昴の教室のドアで、昴を呼ぶ。
「あ、はい。なんでしょうか」
昴は、こちらに向かってくる。

京助は、廊下の端っこに、昴を連れて行く。用件を話す。
「俺さ、雪菜と別れた」
急な発言に昴はえっ！？と驚く。
「な、なんでですか？」
「雪菜は、俺の事も好きだし、お前の事も好きらしい」
「えぇっ！？でも、俺、振られたし…」
「密かに好きだったってよ」
「ま、まじですか…」
昴は、下に俯く。
「だから、俺と昴、勝負しよう」
「へ？」
「そうだな。雪菜が、どっちか選ぶまで、アタックしまくるって事で」
「え、そんな、難しいでしょ」
「その方が、お互いの事知れるし、ちゃんとけじめが付けられると思う」
「む、無理です」
「お前は、雪菜の事、本気で好きじゃないのか？」
昴は、顔を上げて、
「好きです！」
「じゃあ、決まり」
「頑張ります」
「うん、じゃあね」
「はい」
昴は、一息つく。
まさか、雪菜が、俺の事をちょっとでも、見ていてくれたなんて。
信じがたい事だけど、信じるしかない。
くそっ雪菜の奴。俺を振り回しやがって。
俺は、フッと笑った。

１１話（前書き）

風邪を引いてしまい、結構、休んでしまいましたw

お気に入りに入れていただいた方、どうもありがとうございます。

これからもよろしくお願いします。

11話

「雪菜〜」
「きょ、京助！」
京助はいきなり、雪菜の隣にすわり、笑顔で、
「やぁ」
と言う。私は、ドキッてしてしまう。
「やっぱ、このヒミツの場所は、俺にとっちゃ特権だな」
「え、本当に、昴と！？」
「当然。昴くんも、喜んでいたみたいだよ？」
「あの昴がぁ？」
「うんうん。まぁ、絶対勝つけどね」
「…。」
私は、何も言えない。
自分で、犯してしまった事だ。
どうせは、自分で決められない。
なら…。しょうがないのかな。
これで、キッパリ決められたらいいけど…。

「雪菜は、どこなんだ…」
昴は、必死で、校内を探す。
「もしも、京助といたら、どうすんだ…」
昴は、とても悪い予感を感じていた。

早く、見つけださないと…。

「こ、こしょわいょっぉ。きょ、きょぉすけぇっ」
私は、たまたま、京助の腕が、脇に当たり、笑うと、京助がそれに気づき、擽り始めた。
「あはは！ココが弱いのか」
「いぢわる…」
私は、脇を擽られると、もうダメだ。
私は、京助の方を見て、
「もう、絶対にしないでね？」
という。
すると、京助が固まる。
「…。雪菜…」
京助は、手で、口、鼻、頬を覆う。
すると、京助は、ふふっと笑い、
「可愛すぎ…」
京助の顔は真っ赤だ。
私は、京助とバチッと目が合い、ついつい逸らしてしまう。
こんな可愛い京助の一面。
初めて見たかも？私は、京助と反対方向を向き、ふふっと笑う、
「あ！雪菜、笑いやがったな」
京助は、また、私の脇を擽る。
「きゃぁぁぁぁぁ！やめっっっってぇぇぇぇ」
私は、大笑いをする。
すると、後ろで、大きな影を出来たのが見える。
「何してんだ？」

私はそっとうしろに振り向くと、そこには、昴がいた。
息が切れているようだ。
「やぁ。昴くん。ちょっと雪菜と遊んでた」
「もう付き合ってねぇのに、慣れなれしすぎでしょ、先輩」
昴は、私の前に立ち、京助との間に手を入れる。
「そんな事ないよ？アピールだよアピール」
京助は、ワザとらしく言う。
すると、昴は、私の腕を引き、
「もう、授業始まる。行こう。」
私は、コクンと頷く。
「じゃあ、さようなら。先輩」
そして、昴と、私は、無言で、その場を去った。
「ふっ、アイツやるなぁ…」
京助は、一人、秘密の場所で座り、呟いた。

12話

「おいっ、雪菜…。ゆーきーなー！」
「…っふぇ？」
私は、目を擦り、あくびをする。
すると、私の横に、大きな影。
「何寝てるのかな？雪菜」
「うあっ」
「昨日も寝てただろ？いい加減にしろ。評価下げてるんだからな」
「えぇぇぇ」
「当然だ」
そういう会話をしていると、周りの皆が、クスクス笑う。
私は、顔が赤くなる。
最近、なんか、物凄く眠たい。
「ほーら、笑ってないで、授業に戻るぞー」
先生は、教科書を手で叩いて、黒板に、英語を書き始める。
皆は、静かになり、教室には、シャーペンの音と、黒板の音だけになる。
そんな中、昴は、私の机に、手紙を投げてきた。
昴は、口パクで、”み　ろ”という。
私は、手紙をそっと開ける。
「…」
”ばーか　授業中に寝るなよな！　なんか悩み事でもあんの？　昨日から、目腫れてる”
と書いてあった。
私は、バッと鏡を胸ポケットから出して、自分の顔を見る。
「うわぁ…」
私は、目の下が腫れているのに、気づいていなかったのか。
そういえば、おとといから、寝てない…。

私は、溜息をつく。
「雪菜！今度は、自分の顔を見て、何をしている？」
うしろから、急に怒鳴られる。
「す、すみま…」
すみませんと言おうとしたら、昴が、席を立ち上がり、
「先生！雪菜、体調が悪いみたいです。さっきから、顔の色が悪いんですよ」
「おお、そういえば本当だな。顔色が悪い。保健室に連れて行ってやれ。昴」
「はい」
昴は、私の手を引いて、教室を出る。
「足元、ふらついてる。大丈夫か？」
「あーうん。目覚めたばっかだし。当然」
私は、へへッと笑う。
それでも、昴は、真剣な目をして、
「本当か？」
「うん。低血圧だしね」
すると、昴は、私の、額に、手を当て、
「熱い…」
「え、うそぉ」
「熱あるぜ、お前」
「そ、そんな事ない…」
いつの間にか、保健室についたが、先生はいなかった。
「先生、いねーな」
「うん…」
「寝とけ。俺、先生、探してくる」
「ありがとぉ…」
確かに、朝から、ちょっとしんどかったかも。
私は、保健室のベッドに入り、カーテンを閉めた。
すると、足音が聞こえた。

昴…かな。
「昴…？」
すると、カーテンがバッと開く。
「雪菜じゃない」
「お、お姉ちゃん！」
私は、バッと起き上がろうとする。
すると、お姉ちゃんは、私の肩を押さえ、
「寝ときなさい」
「ありがと」
そういって、お姉ちゃんは、私に布団をかけた。
そして、椅子に座る。
「お姉ちゃん、どうして保健室に？」
「あぁ。ちょっと、生理痛」
「痛くなさそうだなぁ？」
「サボり。」
お姉ちゃんと私は、フフッと笑う。
「お姉ちゃんも、サボるんだね」
「ん、まあね。雪ちゃんは？」
「なんか、熱っぽい」
「サボり？」
「ちがう！ホントだよ」
「そう」
するとお姉ちゃんは、なぜか真剣な顔をして、俯いた。
「お姉ちゃ…」
「雪ちゃんさぁ、昴の事、どう思ってるの？」
「え…？」
「あたし、噂聞いちゃった」
「噂…？」
「雪ちゃんと昴、キスしたらしーじゃない？」
私は、ドキッとする。

「本当なんだ…」
「で、でも！あたしから、したんじゃなくて…」
「昴から…」
「ごめん…」
すると、お姉ちゃんは、息を少し吸って、
「知ってた…」
お姉ちゃんは、目元を手で隠す。
「昴は、雪ちゃんの事が好きだって」
「え…？」
「昴は、いつも私を見てくれなかった。私が、どんだけ良い服を着ても、プレゼントをあげても、一番、かまったり、喜んだりしてくれるのは、いつも、雪ちゃんだった」
「…」
「昴の目は、いつも、雪ちゃんしか見てなかった！！」
お姉ちゃんは、頬に涙が伝った。
私は、それをただ見つめるしかなかった。
「それに、私、一回、雪ちゃんと京助が、仲良く話してる姿を見せた事があったの」
「え…」
「昴が、ある日、私の家に来て、”雪菜はいる？”っていうの。」
「うん…」
「私は、どうしても、昴に雪ちゃんの事を諦めさせたくて、
”いるけど、今、男子と二人っきりで、部屋にいるよ？”って言った」
「そしたら、予想通り、昴は、悲しい顔になった。でも、私、そんな顔を見たくなかった。とても、悲しそうで、私まで、悲しい気持ちになった」
「うん」
「それで…私、”私とタメの京助って言う人と、話してるんだぁ。なんか、雪ちゃんったら、京助を気に入ったみたいで”って、もっ

と、傷つけた。本当は、そんな事言いたくなかった。でも止まらなかったの」
「うん…」
お姉ちゃんは、いきなり、私の肩を掴み、
「お願い…雪ちゃん！！私に、昴をちょうだ…」
カーテンがバッと開く。
そこには、昴がいた。
「由美…」
「…昴」
「雪菜にそれ頼んでも、意味ないよ。俺が、ただ雪菜のことを一方的に好きなだけ」
「…」
「だから…ごめん」
「分かってるよ…。最初っから分かってたの。どうにもならないって。昴の心は私には、向かないって。でも、好きなの…。」
「ありがとう。嬉しい。けど、無理だ」
「…分かったよ…。じゃあ、そろそろ行くね」
「うん」
「じゃあ…ね」
「うん」
「あ、お姉ちゃん、ばいばい」
「お大事に」
由美は、その場を去っていった。
「あーあ。お姉ちゃんを振っちゃったよ。昴ったら。あんな良い人いないよ？」
「俺には、お前しか女に見えないって」
「ふふ…。」
「あ？」
「ちょっと、嬉しかった…かも」
そう照れながら言うと、昴は顔を赤く染め、

「寝てろ！熱上がるぞ！」
昴は、慌てて、私に布団を頭までかぶせる。
私は、布団の中で、うずくまり、自分の、答えを探した。

13話

「雪ちゃぁん！京助から、電話よー」
お姉ちゃんが、私の部屋に向かって、叫び、家の廊下に鳴り響く。
私は、慌てて、階段を降り、リビングに向かう。
そして、受話器を受け取り、耳にあて、
「もしもしー雪菜です」
『おー雪菜。夜遅くにごめんな』
「大丈夫だよー。で、どうしたの？」
京助は、ゴホンッと咳払いをして、
『あのさー…明日、土曜日に、どっか2人で行かね？』
「ふ、2人で！？」
『とーぜん。だめか？』
「い、いいけど…」
『おっしゃ！じゃー、どこ行く？』
「うーん…京助が決めて」
『そうだな…ちょぃと金使って、映画でも観に行く？』
「え、映画！？いいの！？今、見たいのあったの！あ、でも、恋愛系なんだけど…」
『全然いいよ』
「やったぁ。じゃあ、明日、12時に、駅で」
『おーけー』
「じゃあ、おやすみ」
『おやすみ♪』
会話を終え、私は、受話器を、置いた。
嬉しい！初めての、京助とのデート…。
でも、付き合ってないし…いちゃいちゃできないけど、嬉しいな…。
昴には、申し訳ないけど…ね。
私は、緊張とともに就寝した。

「お姉ちゃん～～～！」
私は、朝っぱらから、大声で、叫んだ。
そして、お姉ちゃんが、私の部屋に入る。
私は、即座に、お姉ちゃんにしがみつく。
「何よー」
「お願い！！かわいいワンピース貸してぇ」
「えぇ？ワンピース？」
「うんうん」
「ふーん…なるほど。勝負服か…。よし！お姉ちゃんに任せなさい！！」
由美は、雪菜を連れて、由美の部屋にいれさせ、服を着替えさせる。
「まずわねー。甘い系のワンピース！んー、コレがいいわね。」
「あ、あたしに似合う？」
「すっごい似合うわよ♪」
「そして、かっこいい系のライダージャケット！」
「ほぉ…。」
「もー超似合う！！」
「そお？」
「うんうん♪で、締めに、黒のニーハイソよ♪」
「ほぉ…。」
「いいねぇ♪これで、京助の心はバッチシよ」
「う、うん」
「頑張って！！」
「うん！」
私は、階段を駆け降り、ブーツを急いで履く。
ちょっと、気合いれすぎたかも…。
私は、そう思いながらも、家を出た。

１４話

「１０分前についちゃった。」
私は、駅の前にポツンと立ち尽くす。
急ぎすぎたかな…。
私は、気合の入った服を改めて、店のウィンドウで見た。
「だ…いじょうぶかなぁ」
私は、色んなポーズをしてみながら、笑顔の練習をする。
緊張するぅ…。もう、胸は裂けそうなぐらい、どきどきしていた。
「すんませーん。そこのお嬢さん」
「んえ？」
私は、ポカーンとしながら、背の高いチャラ男の３人に囲まれた。
「な、なんですか？」
「誰かと待ち合わせー？」
「えー、あー、はい」
私は、今何が起こっているか、わからず、ただ、ポカーンとする。
「でもさー、男が遅れて来るなんて、悪いやつだねー」
「え…？」
「どーせならさー、俺たちと一緒に遊ぼうよー」
「えぇ？」
私は、驚き、後ずさりする。
「ねー？俺たちと遊ぶほうが、きっと楽しいよー」
「そーそー」
「いや…あの…」
私は驚きのあまり、立ち竦む。
すると、後ろから、誰かが、私の腕を掴む。
そして、手を握られた。
「え…？」
私は、パッと後ろを振り向く。

「なんだー兄さん」
その人は、チャラ男を睨みつけて、
「こいつは、俺の女だから、絡むな」
「あぁ？」
「聞こえなかったか？俺の女だっつってんの」
「なんだてめー。もともとお前が、来るの遅いから、この女が困ってたんだよ」
「そうなのか？雪菜」
私は、いきなり指摘され、ビクッとしながらも、首を振った。
「ちがうよっ。あたしが、早く来ただけで…いきなりこの人たちが話しかけてきたの」
「な、何いってんだよ、ねーちゃん」
「雪菜がそーいってんだ、さっさと去れ」
「ちっ、つまんねーヤツ」
チャラ男は、ズカズカと去っていった。
「大丈夫か？雪菜」
「ごめんね、京助。」
「こっちこそごめん。もうちょっと早く着いてれば」
「いいよ。大丈夫だし。」
私は、ニコッと微笑んだ。すると、京助も、微笑み返す。
「俺、かっこよかった？」
突然の発言にびっくりする。
私は赤面になり、
「かっ…こよかったよ？」
「嬉しい」
「え…へへ」
私は、未だに、京助と手が繋がっている。暖かな手。
私は、さらに、強く握る。
すると、京助は、一度手を離し、恋人繋ぎに変えた。
「今日だけ…な？」

「う、うん」

私は、緊張しながらも、水族館へ向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5499j/

恋愛季節

2010年10月10日20時37分発行